

あんげろす

「死と向き合う」

大学のゼミ仲間の一人ががんで入院加療することになり、先は長くないことを宣告された。その彼から私に、「これまで死と真剣に向き合うことは無かったので、心の平静を保ってその時を迎えるためにはどうしたら良いか、智慧を貸してほしい」との頼みがあった。

また最近小学校以来の友達グループの一人がやはりがんを宣告されたので激励のためにと集まったものの、多くは「死への心備えは出来ていない」と深刻な表情だった。

死こそ生にとっての根本的な事実であり、真剣に死と向き合うことなしに自覚的に生きることは出来ないはずなのだが、高い教育を受け社会的な地位もある人々も、多くは死と向き合うことを避けて漫然と日々を過ごしてきているのだ。日本社会が「死に打ち勝つ」希望の福音といかに縁遠いかを改めて思い知らされている。

久世 了

第36号

2005. 3.

